

日本語コンピュータ文の談話機能と語順の原理 ——「AがBだ」と「AのがBだ」構文をめぐって——

砂 川 有里子

0. はじめに

同一のコンテキストで同じ意味を表すのにいくつかの異なった表現が可能ながある。例えば、ある事件の犯人を指さして「犯人はあの男だ」と言うこともあるし、「あの男が犯人だ」と言うこともある⁽¹⁾。どちらの表現を選んだとしても「犯人」という変項名詞句（西山1990）の値が「あの男」という表現の示す人物によって特定されるという解釈が成立する。「AがBだ」「AのがBだ」という文に関する従来の研究は、上記のような解釈が可能なタイプ、すなわち「BはAだ」に言い換えても意味が変わらない用法だけに限られてきた。しかし、実際の用例を観察してみると、そのような解釈では納まりきらない用法も存在する。特に「AのがBだ」という分裂文の場合にそれが顕著に認められるのである。この問題は単にコンピュータ文の意味記述についての問題であるだけでなく、談話機能における語順の原理とも関わる重要な問題でもあるが、これまで必ずしも十分な検討が行われてきたとはいえない。

ところで、従来からこの種の問題を考察する上では「情報の質」という考え方に重要な手がかりを求めることが多い。情報の質にかかわる概念としては、新情報・旧情報を初めとして前提・焦点・予測可能・同定可能・復元可能・探索可能・活性化など、微妙に規定が異なりながらも類似した数多くの用語が使用され、それぞれの理解を困難にしている。その上、立場の違いに応じて同じ用語にいくつもの異なった規定が与えられてさらに混乱が助長されるという結果となっている。とは言え、この種の研究は以下の大きな二つの流れに分けて考えることができるように思われる。

まずひとつは、「情報の喚起力」という観点から見る立場である。これは、文の特定要素の示す情報が聞き手の意識の中でどのような認知状態にあるのかに着目するもので、発話の時点で「ある指示対象がどの程度聞き手の意識にの

ぼっているか（あるいはのぼりうるか）」を問題にするものである。このような立場をここでは「対象喚起的立場」と呼ぶことにする。

もうひとつの立場は、「情報の伝達力」という観点から見る立場である。これは、ある命題を構成する内容が伝達される際に、それを表す文の構成要素間の相対的な情報伝達力の差異に着目する立場で、「何を前提とし、何を焦点として伝達するか」ということが問題となる。ここではこの立場を「命題伝達の立場」と呼んでおくことにしたい⁽²⁾。

コピュラ文の問題に関わる従来の研究は、この情報の質に関する対象喚起的立場か命題伝達の立場のいずれかの立場にもとづいて行われてきているものがほとんどである。そこで、本稿では、まずそれぞれの特徴的な論点を検討し、その問題点を指摘するとともに、対象喚起的立場と命題伝達の立場は相互に排他的なものではなく、むしろ双方の観点を取り入れる必要があること、そうすることによって、「情報の重要性」を提示する機能に、「焦点提示機能」と「特立提示機能」という異なったレベルの二つの機能の規定が可能になることを明らかにする。また「A（の）がBだ」というコピュラ文の分析に際して「後項特立文」という新たなカテゴリーを導入することで、コピュラ文の異なった機能の記述を可能にし、冒頭に提起した問題に一定の解決をもたらしうること、さらに「前項焦点文」と「後項特立文」という二つのタイプの機能の違いが、文頭・文末といった文中の特定の位置にどのような語句を割り振るかという語順の問題と密接に関連する問題であるということについても触れたいと思う。

1. 対象喚起的立場と命題伝達の立場

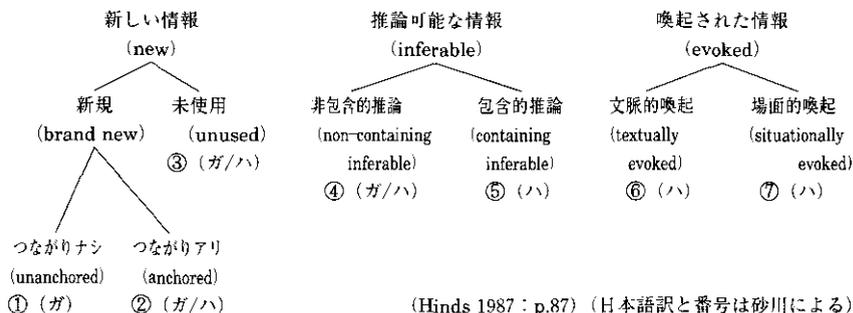
1.1 対象喚起的立場：「は」「が」の使用条件

対象喚起的立場の代表にプリンス（1981）をあげることができる。プリンスは、情報の質における新旧概念に関して、単純な新情報・旧情報の二分法ではなくその中間にさらにいくつかの段階を設けなければならないという立場から「話し手の想定する親近性」（以下単に「親近性」と呼ぶ）の分類を提唱した。その分類を利用して「は」と「が」の使用条件の記述を試みたものにハインズ（1987）がある。

ハインズは、「は」が文脈から喚起された情報や推論可能な情報を表す名詞句に伴うだけでなく、プリンスが「未使用情報」や「つながりのある新規情報」と名付けた新しい情報を表す名詞句にも伴うと主張する一方で、「が」に

関しては、新しい情報を表す名詞句だけでなく推論可能な情報を表す名詞句にも伴いうると結論づけた。その結果を次に示す。

話し手の想定する親近性
(assumed familiarity)



すなわち、「が」しか用いることのできない名詞句というのは、上図①の「つながりのない新規情報」を表す名詞句だけで、それ以外の認知状態を示す名詞句は「は」を伴いうる、また、④の「非包含的推論」が可能な情報を表す名詞句の場合は「は」だけでなく「が」も伴いうるということである。

ハインズは、従来「は」が用いられないとされていた新しい情報でも、「未使用情報」や「つながりのある新規情報」を表す名詞句の場合は「は」が伴いうると主張し、その点について、構文的な制約と修辭的なテキスト構造との関わりという二つの側面から説明を試みている。しかし、新しい情報以外の情報を表す名詞句が「が」を伴いうることに関しては、特に考察が試みられているわけではない。さらに、上の図に示した結論がどのような調査に基づいて得られたものであるのかもはっきりしない。

筆者が調査したところによると、少なくとも「AがBだ」という構文においては、ハインズの結果とは全く異なった結論が得られている。筆者としてはプリンスの分類方法にそのまま依拠する考えはないが、ハインズの結論と対比しつつ疑問点を明確にするために、ここではとりあえず、ハインズと同様、プリンスの分類に従って筆者なりに行った調査の結果について触れておくことにしたい。

この調査は、エッセイ集や一般向けの雑誌から「AがBだ」の用例111例を

収集し、その名詞句Aの親近性を判定したものである。以下、プリンスの分類項目と、それぞれに該当すると考えられる用例をあげることにする。

- ① つながりのない新規情報：談話内に全く新規に導入される情報
 - (1) 研究所で研究が行われている将来製品は、おおむねこの「実験段階」にあると言ってよいだろう。自動翻訳電話などが好例である。(『中央公論』93年12月号)
- ② つながりのある新規情報：一部先行文脈を受けている部分があるが、全体としては新規に導入される情報
 - (2) 在学中に世界40カ国を放浪し、イスラエルではキブツで暮らしたこともある。「イスラエルの農業」が卒業論文のテーマだった。(『中央公論』93年12月号)
- ③ 未使用情報：恒常的な記憶のストックの中に蓄えられているが該当の談話では使用されていない情報……該当例なし
- ④ 非包含的推論が可能な情報：先行文脈や発話場面の状況から推論することが可能な情報
 - (3) こうしてこの第二の仮説も無価値なものとして煙のように消え去りました。しかしケプラーは気を取りなおし、もう一度出なおします。そして第三の仮説が精円でした。(山下正男『論理的に考えること』岩波ジュニア新書)
- ⑤ 包含的推論が可能な情報：当の名詞句の中に先行文脈を受ける要素が存在し、それを手がかりにして推論することが可能な情報
 - (4) これまでにない新たな力を感じとったドイツは、国際交渉の場でも相手を陥れるような態度をとるようになり、その後、紆余曲折があったとはいえ、簡単にいえばその結果が第一次世界大戦なのである。(『中央公論』93年12月号)
- ⑥ 文脈によって喚起されている情報：指示詞や繰り返しなどで、先行文脈にすでに現れていた情報が再び指示されている場合
 - (5) 対流圏の上11杆から50杆の層は気温が上に行くほど高くなり、大気は安定した成層となる。これが成層圏である。(潮文社編集部編『心に残るとっておきの話』潮文社)
- ⑦ 場面によって喚起されている情報：眼前に存在するものや話し手・聞き手など、発話場面を構成している情報……該当例なし

収集した111例を以上のような基準に基づいて分類した結果は以下の通りである。

表1 「AがBだ」「A」の親近性

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	計
22	12	0	17	14	46	0	111
19.8%	10.8%	0%	15.3%	12.6%	41.4%	0%	100%

ハインズが「が」は用いられないとした⑤や⑥に相当数の用例が見いだされたことに着目していただきたい。特に⑥の「文脈によって喚起されている情報」を表すものと判定された例は46例で全体の41%もの割合を占めている。この種の用例には(5)の例にも示したとおり、直前の文脈の内容を指示詞で指し示しているものが多い。すなわち、最も喚起されやすい情報を表す名詞句が非常に高い比率で「が」を伴っているわけであり、ハインズの結論とは大きく食い違っている。筆者としてはこの齟齬に立論の手掛かりを求めたいと考えるが、その前に、もう一方の命題伝達的な立場の代表として西山(1990)の説と、それを批判的に継承した天野(1995a, 1995b)の説を検討することにする。

1.2 命題伝達の立場：「A(の)がBだ」の意味記述

西山(1990)は「A(の)がBだ」というコピュラ文に指定文・同定文・同一性文の三つのタイプがあり、それらはいずれも倒置した形式の「BはAだ」に言い換えることができるとしている。この三つのタイプの区別は、名詞句A・Bそれぞれの意味解釈の違いに求められる。すなわち名詞句が指示的であるか、非指示的な変項名詞句であるか、指示的な場合はトークン指示であるかタイプ指示であるかという点が分類の基準になる⁽³⁾。以上をまとめると次のようになる⁽⁴⁾。

	A	B
指定文	指示名詞句(値名詞句)	非指示名詞句(変項名詞句)
同一性文	指示名詞句(トークン指示)	指示名詞句(トークン指示)
同定文	指示名詞句(タイプ指示)	指示名詞句(トークン指示)

例えば、「あそこに立っている人が幹事だ」という文は、「幹事はだれかという」とあそこに立っている人である」とパラフレーズでき、変項名詞句「幹事」

の求める値を値名詞句「あそこに立っている人」によって満たす「指定文」である。また、「昨日公園の入り口でぶつかったあの男が(目の前の)こいつだ」という文は、「こいつ」という表現が示す指示対象を「昨日公園の入り口でぶつかったあの男」が示す指示対象によって同一と認定する「同一性文」である。そして「同定文」とは、Bの指示対象がAというユニークなカテゴリーに属するメンバーであると述べることによってBを他から区別するもので、例えば山田さんに反対されてがっかりしている人をなぐさめるのに「なんでも反対するのが山田さんだ」と言うような場合がそれであるとされている。

これら三種の「A(の)がBだ」に以上の相違があることを認めたとしても、「Bが何かというとAである」のような意味を表しているという点では、どのタイプも共通している。すなわちこれらの三つのタイプは「BがXである」という命題が前提となっており、「そのXがAである」ことを主張しているとの解釈が可能である⁽⁵⁾。話し手はこの命題を聞き手も共有できるものとして発話しているのであるから、それを構成するBの指示対象が聞き手に予想できない新規のものであるということは考えにくい。しかし、筆者が調査したところによると、Bの名詞句が談話に新規に導入される情報—親近性の尺度で①や②に分類される情報—である場合が少なくないのである⁽⁶⁾。

表2 「AがBだ」の「B」親近性

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	計
6	5	6	57	16	19	2	111
5.4%	4.5%	5.4%	51.4%	14.4%	17.1%	1.8%	100%

表3 「AのがBだ」の「B」の親近性

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	計
42	3	0	16	11	27	6	105
40.0%	2.9%	0%	15.2%	10.5%	25.7%	5.7%	100%

表2にあるように、「AがBだ」111例のうち6例のBが①の「つながりがない新規情報」であると判定された。これは全体の比率からするとわずか5.4%でしかないが、②の「つながりがある新規情報」も含めると新規情報が約1割を占めることになる。そしてさらに目を引くのは表3に示した結果である。「A

のがBだ」105例の場合、全体の40%にもものぼる42例のBが①と判定されている。②もあわせると42.9%となり、全体の半数近くのBが談話に新たに導入される情報であると判定されたのである。例えば次の例を見てみよう。

- (6) さらにここでは、パンに塗ってもおいしいほどの自家製オリーブ油と、キャンティ・クラシコ本場の自家製ワインが人気。フィレンツェから車で30分の道程をドライブかたがたやってくるお客さんもたくさんいます。手塩にかけて人気のワインを見守っているのが、ピエトロ・ピリジいさん。ワイン一筋65年の大ベテランで、美術館の地下の酒蔵のワインとともに生きています。(『家庭画報』91年7月号)

下線部の「ピエトロ・ピリジいさん」はこの談話で初出の人物である。この文を「ピエトロ・ピリジいさんは誰か」というと、手塩にかけて人気のワインを見守っている人だ」と解釈するのは無理であり、したがって「BがXである」という前提が成立しているとは考えられないことが分かる。熊本(1989)はBに新規の情報が用いられるこの種の文に「Bが了解された指示対象であるという印象を与える効果」があると述べている(p. 315)。確かに、聞き手に対して何らかの形でBが印象づけられるという効果があることは認めるが、しかしそれは、熊本の言うような「Bが了解された指示対象である」という印象なのではなく、聞き手の短期記憶に長く残りやすくするような特立的な提示が行われたことから生じる印象なのではないか。この点については2節で詳しく述べることにする。

これまでの研究では十分な扱いを受けてこなかったこの種の用法に着目し、コピュラ文の再分類を試みたものに天野(1995a, 1995b)があげられる。

天野(1995b)は、「AがBだ」「AのがBだ」という形式に着目し、これらの文には西山(1990)が「指定文」と呼んでいるタイプ、すなわち、「Bであるものは何か」というと、それはAだ」という意味を表すものの他に、「Aであるものは何か」というと、それはBだ」という意味を表すものもあるとして、前者を「前項焦点文」、後者を「後項焦点文」と名付けた。前者が「X(の)がBだ」という前提と「X=A」という焦点を持ち、後者が「A(の)がXだ」という前提と「X=B」という焦点を持つところから命名されたものであり、西山(1990)の命題達伝的な立場を引き継ぎつつ議論を拡張したものである⁽⁷⁾。

これではやく(6)のようなタイプに所属先が設けられたことになるのだが、ここにも問題がないわけではない。「後項焦点文」を「A(の)がXだ」という前提を踏まえて“X=B”を主張する文である」と規定してしまうと、次のような現象に対して説明が付けられなくなってしまふ。

(7) なぜアメリカに「癌センター」を、と思われる方のために、私とアメリカと癌との関係話を話させていただきたい。

- a. 私とアメリカを結びつけたのは父である。(『文藝春秋』93年1月号)
- b. (?) 私とアメリカを結びつけたのが父である。

(a)は「AのはBだ」という構文であるが、この文の解釈は「私とアメリカを結びつけたのがXだ」という前提を踏まえて「そのXが父である」ことを主張しているものであると言えよう。このことから「A(の)はBだ」という文は、「A(の)がXだ」という前提と「X=B」という焦点を持つものであると規定することが出来る。つまり「A(の)はBだ」は後項のBが焦点となると規定することが出来る。つまり「A(の)はBだ」は後項のBが焦点となる「後項焦点文」なのである。「後項焦点文」という名称はこの「A(の)はBだ」という構文にこそふさわしいものとは言えないだろうか。ところが天野が主張するように、「A(の)がBだ」も「後項焦点文」であるとするなら、これら二つの構文は全く同じ意味構造を持つということになってしまう。それなのに(7a)が自然で(7b)が不自然であるということはどのように説明すればよいのだろうか。

この疑問に対して解決の糸口を与えてくれるものに、ヘリングとバオリロ(1995)がある。次節では彼らの説を手掛りにして、天野が「焦点」と呼んだものが、実は異なったレベルの2種の概念として再規定されなければならないものであることを明らかにしたいと思う。

2. 「A(の)がBだ」の談話機能

2.1 特立提示機能と焦点提示機能

ヘリングとバオリロ(1995)は「話し手が特に目立たせようとしている情報」を「焦点化された情報」と呼び、このような意味での「焦点」を問題にする場合に少なくとも「特立提示焦点(presentational focus)」と「WH焦点(WH

focus)」という二種の焦点の存在を考えるべきであると主張している。彼らはこの二種の焦点に明確な規定を与えていたわけではないが、WH焦点の方は、疑問詞疑問文の焦点やそれに対する答え文の焦点であるとしているところから、従来の命題伝達的な立場で前提に対するものとして規定される焦点と同じもの（より厳密には「 $X = A$ 」という焦点命題を構成する「 A 」の部分）であると考えられる。他方の特立提示焦点というのは、ヘッロン（1975）によって提唱された特立提示機能（presentative function）の概念を継承したもので、談話に新規に導入された指示対象か、あるいは「情報的に重要な」指示対象を提示している部分という意味で用いられているようである。しかし、「情報的に重要な」という規定では、情報伝達上重要な情報であることを示すWH焦点との違いが不明である。また、ヘッロンの特立提示機能というのは、ある指示対象を聞き手の短期記憶に長く留めるための言語的操作に関わる対象喚起的な立場からの規定であり、命題伝達的な立場からの規定である焦点とは、全くレベルの異なる概念である。確かに「話し手が特に目立たせようとしている情報」という直感的にしか捉えられてこなかった問題を、命題伝達的な立場と対象喚起的立場の両方の観点から捉え直そうとした試みは、従来の議論に新たな視点を導入したものとして評価できるが、レベルの異なる概念を「WH焦点」か「特立提示焦点」かといったような同一範疇の相対する概念として捉え、その本質的な差異を見過ごしているヘリングとパオリロの見方には問題があると考えられる。

彼らが着目した特立提示機能とは、ヘッロン（1975）によれば「後続の談話や後の状況の中で想起するために、文の中の一つの要素に対して特別の注意を喚起する」機能であると規定される（p. 374）。このような想起が必要になるのは、後続の談話でその要素が直接的・間接的に再び言及されるときや、後続の談話で述べられる事柄がその要素と関連のあるものであるとき、あるいは、現実世界において起ころうとすることや行われようとする事とその要素が何らかの関連があるときで、そのような場合に想起を容易にするための手段が言語には備わっているとヘッロンは主張する。そして、その機能の重要な実現手段として特立提示移動（presentative movement）があげられる。これは、想起させたい要素を文末か、通常的位置よりも後ろの位置に移動するという操作で、例えば英語では疑似分裂文や右方転移文がその事例であるとされている。

短期記憶の中では最も新しく聞いたことが最も記憶に残りやすい。この事実を考えると、文末に重要な情報を位置づけるというのは十分に納得できること

である。このような対象認知的な意味で重要だとされる「特立提示機能」と情報伝達力の点で重要だとされる「焦点提示機能」とは、異なったレベルの異なった概念として区別されなければならない。ある情報を焦点として提示するということは、ある命題内容を伝達する際に存在する話し手と聞き手との間の情報量の差が前提となっており、その差を埋めるという機能を果たすものである。一方、ある情報を特立的に提示するというのは、その情報を聞き手に強く印象づけて、聞き手の短期記憶の中により長い間留めさせるという機能を果たすものである。このようなことが行われるのは、多くの場合、それ以降の談話内で再び言及するなど、その情報に談話構成上の重要な役割を与えるためである。その際、話し手と聞き手との間の情報量の差が前提となる必要はない。

以上の点を確認したうえで問題のコピュラ文に立ち戻ると、「AがBだ」「AのがBだ」にはそれぞれ少くとも次に示す二種の区別が立てられるのではないかと思われる。

- (イ) Aを焦点として提示するために用いられているもの
- (ロ) Bを特立的に提示するために用いられているもの

(イ)は天野(1995b)にならって「前項焦点文」と呼んでおくが、(ロ)の名称に関しては新たに「後項特立文」と呼ぶことにしたい⁽⁸⁾。次節以下では、これら2種の「A(の)がBだ」文の特徴を談話機能という側面を中心にして述べることにする。

2.2 前項焦点文

前項焦点文「A(の)がBだ」は、すでに述べたように「BがXである」という命題を前提とし「X=A」を主張する文である。基本的には主語名詞句と述語名詞句を入れ替えて「BはAだ」の形に言い換えられる。

- (8) キュウリがドレスを来たのは世界でも最初のことではないか。直径4センチ、長さ26センチ、厚さ0.07ミリのビニールの筒。
 - a. これがキュウリのドレスの正体である。(山下惣一『村に吹く風』新潮文庫)
 - b. キュウリのドレスの正体はこれである。
- (9) 今の若い人は、旅に行ってモノに出会おうとするけど、ほくは

- a. ヒトに出会うのが旅だと思っている。(『文藝春秋』93年1月号)
- b. 旅は人に出会うことだと思っている。

このように、前項焦点文の「A (の) がBだ」とそれを言い換えた「BはAだ」という文は同じ意味構造を持っており、どちらの場合も「Bが何かというとAだ」という文に言い換えることができる。しかし、プロソディックな強勢を伴うかどうかという点を見てみると、両者には異なりがあることが分かる。すなわち、「A (の) がBだ」の場合、Aの部分が強勢を伴って発音され、Bの部分は強勢を伴わないのが普通であるが、「BはAだ」の場合はAの方もBと同様に強勢を伴いにくい。このことから、「A (の) がBだ」の方が焦点部をより卓立させて提示することのできる構造であると言うことができる。

この両者の区別は、文頭という極めて重要な位置に焦点を構成する語句を配置するか、あるいは前提を構成する語句を配置するかという語順の問題に還元できるのではないと思われるが、この点については3節で考察することにして、以下は「後項特立文」の特徴を素描することにした。

2.3 後項特立文

後項特立文の「A (の) がBだ」は、特立的な提示を行うために用いられる構文である。この文は、前項焦点文とは違って「BはAだ」に言い換えることができない。

- (10) 以上で矛盾と反対の区別がわかったと思いますが、実は今の二つに似たもう一つのものがあるのです。そして
 - a. それが小反対です。(山下正男『論理的に考えること』岩波ジュニア新書)
 - b. (?) 小反対はそれです。
- (11) そして吉野へ入って一泊して、
 - a. おすすめなのが早朝6時頃に始まる蔵王堂の勤行。(『家庭画報』91年7月号)
 - b. (?) 早朝6時頃に始まる蔵王堂の勤行はおすすめです。

(10b) (11b) が許容されないという事実は、後項特立文が前項焦点文とは異なる意味構造を持つという我々の主張を裏付けるものである。

すでに述べたように、天野 (1995 a, 1995 b) は上記の「A (の) がBだ」を「AがXだ」という前提と「X=B」という焦点を持つものであると主張している。その際、根拠として挙げられているのは次の2点である。

- ① 「A (の) がBだ」に「何だと思う?」という挿入句を差し挟み、「A (の) が, 何だと思う?, Bだ」とすることができる。
- ② 「A (の) がBだ」のBを「例えば」で修飾し、「A (の) が, 例えば Bだ」とすることができる。

天野が指摘している以上2点の他にも、「なんと」「意外にも」など予想外の気持ちを表す修飾句を伴ったり、類似の他の存在から区別して特定する修飾句「ほかでもない」を伴うことができる。

- (12) そして最後に出てきたのが、{なんと/意外にも/ほかでもない}、大きな熊だったのです。

このように、後項特立文には「X=B」という焦点を持つと言ってもよいような現象が観察される。しかし、プロソディックな強勢が伴うのは、通常BよりもむしろAのほうである。(12) の例のように特にBを取り立てる修飾が加えられている場合はBに強勢を伴わせることが可能だが、このような場合でもAを差し置いてBだけに強勢を伴わせるのはむずかしい。後項特立文「A (の) がBだ」に前提「AがXだ」と焦点「X=B」を認めないという我々の立場はこれによっても支持される。

さて、後項特立文「A (の) がBだ」を観察して気づくのは、この文のAに直前の先行詞を受ける照応詞が含まれていることが極めて多いという点である。「AがBだ」の場合は111例中23例が後項特立文と判定されたが⁽⁹⁾、その中でA項に直前の先行詞を受ける照応詞の存在が認められたのは20例にのぼる。

(10a) の「それが小反対です」に見られる「それ」がその例である。残る3例は、直前の先行文脈から引き継がれた序数詞が用いられている次のような例である。

- (13) こうしてこの第二の仮説も無価値なものとして煙のように消え去りました。しかしケプラーは気をとりなおし、もう一度出なおします。そし

て第三の仮説が精円でした。(山下正男『論理的に考えること』岩波ジュニア新書)

一方、「AのがBだ」のAの場合は、直前の内容を引き継いでさらに新たな情報をつけ加え内容を発展させている次のような例がきわめて多い。

- (14) ナムジンは「……………新人の気持ちで日本の歌を勉強して、アジアの歌を世界に紹介したい」と語る。/そこで今、ナムジンが計画しているのが、チョー・ヨンピル、キム・ヨンジャ、ケー・ウンスクら韓国人歌手によるチャリティーコンサート。(『Be-Common』91年12月号)(「/」は段落の切れ目を表す)

「AのがBだ」105例中、後項特立文であると判定されたのは60例であるが、その内の50例が直前の内容を引き継ぐ上記のような例である。また、その場合に「最後に」「特に」などの特立的な叙述が行われることが多いという点をその特徴として挙げることができる⁽¹⁰⁾。

- (15) 小角はまた首をふった。「あなた方でもダメだ」。最後に凄まじい雷鳴と岩なりの中から現れたのが、金剛蔵王菩薩大権現だ。(『家庭画報』91年7月号)
- (16) 人魚をめぐる神話や伝承は、世界中至る所に残されているが、中でも最も有名なのがギリシャ神話のセイレーンだろう。(『Estaminet』91年12月号)

残る10例のA項は、「つながりのない新規情報」を表すものだが、その場合も次の下線部に見られるように、何らかの特立的な叙述が行われている。

- (17) 茂木友三郎・山崎敏光・恩田饒・白鳥栄一・西田敬宇/昭和28年、上野高校卒である。/タイム・カプセルを開けて一番変わっていないのが山崎だ。(『文藝春秋』93年1月号)(「/」は段落の切れ目を表す)

以上の観察から、「AのがBだ」のAは、典型的には、直前の文脈に関連のある情報に、さらに新たな情報をつけ加えて特立的な資格を叙述し、その資格を

満たすBを提示するための橋渡しをするという機能、すなわちBを特立提示するためのリード役を果たしているものと考えられる。BよりもAにプロソディックな強勢がおかれるという点も、特立的な内容を叙述するというAの機能によるものであると言うことによって説明が付けられるわけである。

後項特立文に、「Aが何か」というような読みが可能となるのは、あらかじめ「AがXだ」という前提があるためではなく、ある項目を特立的に提示するためのリード部によって情報を加えられることから生ずる結果であると考えられる。すなわち、リード部の特立的な叙述によって、その項目に対する聞き手の興味が刺激され、その結果としてBを効果的に導入する機能が果たされるわけであるが、その際に「Aが何か」という読みが生じやすくなるのである。

このように、後項特立文「A（の）がBだ」という構文は、もっぱら特立的な提示を行いやすくするための構造であり、その機能は、リード部Aに述べられた特立的な資格を満たすものとしてBを特立的に提示することにある。その結果、Bを聞き手に強く印象づけることになり、後続談話におけるBの想起が一層容易に行われるようになるのである。

次の表は、後項特立文と前項焦点文それぞれのB項が後続談話に持続するかどうかを調べたものである⁽¹¹⁾。

表4 後項特立文のBの持続率

	総数	持続する文の数	持続率
「AがBだ」	23	14	60.9%
「AのがBだ」	60	56	93.3%
計	83	70	84.3%

表5 前項焦点文のBの持続率

	総数	持続する文の数	持続率
「AがBだ」	88	21	23.9%
「AのがBだ」	45	13	28.9%
計	133	34	25.6%

この表から明らかな通り、後項特立文のBは前項焦点文のBと比べてはるかに

高い割合で後続談話に持続している。B項が特立的に提示され、後続談話におけるB項の想起が行われやすくなるという我々の主張の正しさを証拠立てる調査結果であると言える。

3. コピュラ文と語順の原理

ヘツロンは多くの言語に特立提示移動を行うための構文が存在すると述べている。我々が問題にしている後項特立文も、特立的に提示する情報を表す名詞句を文の末尾に配置するという特立提示移動のための構文であると言えるだろう。しかしこの構文は、単に特立語句を文末に配置するためだけでなく、先行文脈からの情報を引き継ぐリード部を文頭に配置するための構文でもある。先行文脈と関連のある部分を文頭に、後続文脈と関連づけようとする部分を文末にという語順、つまり、照応関係にある情報同士をなるべく近くに配置するという語順のあり方になっているわけである。

以上のことから、対象喚起的な側面からの語順の原理として「関連する情報はなるべく近くに配置せよ」という原理が存在するものと思われる。

しかし、コピュラ文の語順を考える場合、上記のような対象喚起的な原理に加えて、命題伝達的な側面からの原理というものも考えなくてはならない。ガンデル(1988)の主張する「旧から新への情報の流れ(Given Before New)」と「緊急な情報を先に(First Things First)」という原理がそれである⁽¹²⁾。

「旧から新へ」の原理は、プラーグ学派を初めとしてガンデル(1988)以前からもたびたび指摘されており、多くの言語がこの原則に従うものであることが報告されている。例えば久野(1978)は、日本語は旧から新への情報の流れを原則とする言語であると主張し、動詞が文末に来なければならない日本語の場合、動詞を越えて文末に焦点を位置づけることができないため、焦点は動詞の直前におかれることを原則すると述べている。「BはAだ」というコピュラ文は、まさにこのような情報の流れを実現する構文である。

しかしそれに対応する前項焦点文「A(の)がBだ」の方は、情報伝達上最も重要な焦点部が文頭に、情報量のより少ない前提部が文末に配置されるという語順になっており、「BはAだ」とは全く逆の順序の「新から旧へ」という流れになっている。久野の主張する語順の原則にそむいているわけであるが、このような現象は、ガンデル(1988)やギボン(1988)の報告にもあるように世界の多くの言語の中で特に珍しいものではない。聞き手との間の情報量の差

を埋めるという行為を行う場合、その差を埋めることのできる情報、すなわち最も情報量の大きい情報をまず最初に伝えようと意図することは、常識的に考えても不自然なことではない。聞き手の方としても、自分が最も知りたい情報をまず述べてもらいたいと考えるのは自然なことであろう。情報伝達上重要な情報をまず述べるということは、グライス(1975)の「量の公準」に従っている限り、冗長さの最も少ない適切な伝達方式なのである。

2.2で前項焦点文「A(の)がBだ」はそれを言い換えた「BはAだ」という文よりも焦点部Aを卓立させて提示することのできる構造であると述べた。それは「旧から新へ」という語順原理を退けて「新から旧へ」の原理に従った結果によるものであると思われる。前提を踏まえてその上に新たな情報をつけ加えるという伝達方式は聞き手にとって最も負担の少ない伝達方式であると思われるが、その「旧から新へ」という原理をあえて無視して「新」を先に述べるというのは、この部分を伝達する緊急性や重要性がより強く話し手に意識されたためであると思われる。

このように、文頭というのは情報伝達上重要な役割を果たす位置であるが、さらにこの位置は、対象喚起的な側面からも重要な位置であると考えられる。ヤールヴェラ(1979)は記憶の呼び起こし実験を行った結果、文頭に述べられた要素が文末に述べられた要素に次いで正確に想起される率が高いという結果を得たと報告している。このことから考えると、文頭は文末ほどでないにしても特立的な提示を可能にする位置であると言うことができる。前項焦点文「A(の)がBだ」の文頭要素Aがそれを言い換えた「BはAだ」の文末要素Aよりも卓立していると感じられるのは、「旧」情報が来るのが普通である文頭に「新」情報を配置したということに加えて、文頭という位置が本来的に弱いながらも特立提示機能を果たしうる位置であることによるものであると考えられるのである。

さて、我々は本稿において、「A(の)がBだ」という文の分析を通じて、「後項特立文」というコピュラ文の新たなカテゴリーの導入を試みた。「後項特立文」とは、コピュラ文の意味記述における情報の質に関する従来の議論を統一的に扱う可能性を示しながら、談話機能を構文論的な観点から記述する手がかりを与えうるものであった。さらに、「後項特立文」の談話機能の特質は、情報の提示の方式と語順とが密接に関係していることを示しており、従って談話構成上きわめて重要な「語順の原理」解明への手がかりを示唆していることについても、その一端を観察し得たと考える。アイデアの点描の域を出ないもの

ではあるが、ご叱正をいただければ幸いである。

注

本稿は第8回日本語文法談話会で発表した内容をまとめたものである。その席で貴重なご意見を下さった多くの方々へ感謝の意を表したい。また、原稿の段階で丁寧にコメントをつけて下さったアンドレイ・ベケッシュ、湯沢質幸、砂川裕一の各氏にも感謝したい。

1. 本稿では「だ」というコピュラによって構成される名詞述語文をコピュラ文と呼ぶことにする。コピュラ文には名詞句を主語とする「AがBだ」「AはBだ」というタイプと、いわゆる分裂文「AのがBだ」「AのはBだ」というタイプがある。ここではそのうちの「AがBだ」と「AのがBだ」を扱うが、どちらも共に指す場合には「A（の）がBだ」という表記を用いることもある。
2. 「対象喚起的立場」と「命題伝達の立場」はガンデル(1988)の“referential sence”と“relational sence”の違いにおおよそ重なるものである。ガンデルとの異同については、別の機会に触れる予定である。
3. 西山は、属性名詞句と変項名詞句に対するものとして指示名詞句という区別を立てている。指示名詞句の多くは、話し手・聞き手にとって認定可能 (identifiable) な具体的対象 (token reference) であるが、総称文の主語のように type を指示するものもあるとしている。(西山1990: 135)
4. 西山(1990)で「BがAだ」と記述されているものを本稿では「AがBだ」に読み変えて用いている。記号ABの用法は本稿の方式にあわせて変更してあるので注意されたい。
5. 同様の指摘が天野(1995)にもある。
6. 表2は表1と同じ資料を用いている。表3の資料は異なるが、表1・表2と同様にエッセイ集や一般向け雑誌から用例を収集した。
7. 砂川(1994)でも同様の主張がなされている。
8. 砂川(1996)では(イ)のタイプを「主語卓立型の同定文」、(ロ)のタイプを「特立提示型の同定文」と名付けたが、本稿ではそれぞれを「前項焦点文」「後項特立文」と呼び改めることにする。また、砂川(1996)で「主題-題述型」と呼んだ「B（の）はAだ」については「前項焦点文」の「A（の）がBだ」に相対するものであるところから「後項焦点文」と呼び改めるのが適当であると考えられる。
9. 後項特立文の判定は、「何だと思う?」「例えば」「なんと」「ほかでもない」などが挿入できるかどうかという基準に基づいて行った。
10. 天野(1995b)にも同様の指摘がある。
11. 後続談話への持続の詳細については、砂川(1995a)を参照のこと。
12. この場合の「新」「旧」は、対象喚起的な立場の「新」「旧」とは異なる概念で、情報伝達力の差異を問題にしたものである。詳しくはガンデル(1988)を参照のこと。

参考文献

- 天野みどり (1995a) 「『が』による倒置指定文—『特におすすめなのがこれです』という文について—」新潟大学『人文科学研究』88輯：1-21.
- 天野みどり (1995b) 「後項焦点の『AがBだ』文」新潟大学『人文科学研究』89輯：1-24.
- 上林洋二 (1988) 「措定文と指定文—ハとガの一面」筑波大学『文藝言語研究・言語編』14号：57-74.
- Givón, T. (1983) "Topic continuity in discourse: an introduction." In T. Givón ed. *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross Language Studies*. Amsterdam: John Benjamins. 3-41.
- Givón, T. (1988) "The pragmatic of word-order: predictability, importance and attention." In M. Hammond et al. eds., *Studies in Syntactic Typology*. Amsterdam: John Benjamins. 243-284.
- Grice, H. P. (1975) "Logic and conversation." In P. Cole et al. eds., *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. New York: Academic Press. 41-58.
- Gundel, J. K. (1988) "Universals of topic-comment structure." In M. Hammond et al. eds., *Studies in Syntactic Typology*. Amsterdam: John Benjamins. 209-239.
- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店.
- 熊本千明 (1989) 「指定と同定—『…のが…だ』の解釈をめぐる」大江三郎先生追悼論文集『英語学の視点』九州大学出版会：307-318.
- Jarvella, R. (1979) "Immediate memory and discourse processing." In G. H. Bower ed. *The Psychology of Learning and Motivation, Vol. 13*. 379-421.
- 砂川有里子 (1994) 「コンピュータ文と語順の原理：同定文『AはBだ』と『BがAだ』」『国語学会平成6年度秋季大会要旨』：103-110.
- 砂川有里子 (1995a) 「日本語における分裂文の機能と語順の原理」仁田義雄編『複文の研究・下』くろしお出版：353-388.
- 砂川有里子 (1995b) 「語順と特立提示機能に関する試論—新規項目の導入形式を手がかりとして—」『第4回小出記念日本語教育研究会論文集』：99-112.
- 砂川有里子 (1996) 「日本語コンピュータ文の類型と機能—記述文と同定文—」小泉保博・士古希記念論文集『言語探求の領域』大学書林：261-273.
- 西山祐司 (1979) 「新情報・旧情報という概念について」昭和54年度科学研究費補助金特定研究報告『日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究』：127-151.
- 西山祐司 (1990) 「コンピュータ文における名詞句の解釈をめぐる」国広哲弥教授還暦退官記念論文集『文法と意味の間』くろしお出版：133-148.
- Hinds, J. (1987) "Thematization, assumed familiarity, staging, and syntactic binding in Japanese." In J. Hinds et al. eds. *Perspectives on Topicalization: The Case of Japanese "WA."* Amsterdam/Philadelphia: John

Benjamins. 83-106.

- Prince, E. (1981) "Toward a taxonomy of given-new information." In P. Cole ed. *Radical Pragmatics*. New York : Academic Press. 223-255.
- Hetzon, R. (1975) "The presentative movement or why the ideal word order is V. S. O. P." In C. Li ed. *Word Order and Word Order Change*. Austin : University of Texas Press : 347-388.
- Herring, S. C., & Paolillo, J. C. (1995) "Focus position in SOV languages." In P. Downing et al. eds. *Word Order in Discourse*. Amsterdam/Philadelphia : 163-198.